

製材工場の実態を踏まえた国産材需要拡大の可能性と課題

—九州3県の製材工場アンケートを基に—

森林政策学研究室 後藤 昌充

1. 研究の背景・目的・方法

近年の不況、円高などによって、日本の新規住宅着工数は減少し、現在は多少持ち直したものの、頭打ちの状態となっている(図1)。一方、森林資源は木材価格の値下がりや再造林コストの関係で伐採されず、戦後大量に植林された人工林が大径材化しており、その利用拡大が課題となっている。

このような状況の中で、木材自給率の増加を考えた場合、建築構造材での国産材率を高めるだけでなく、内装材の木質化傾向により、ムクの板材(床・壁用)の需要は今後も伸びる可能性があるとして指摘されている(荻(2009))。また、公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律(通称:公共建築物木材利用促進法)が成立したことも木質内装材の需要増加にとって追い風である。本研究では、九州の製材業者の実態を踏まえて、国産材需要拡大の可能性と課題を明らかにするため、製材業者へのアンケート調査を実施した。

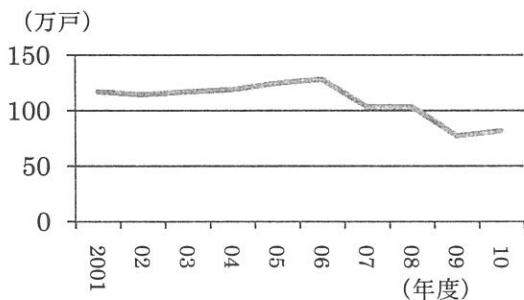


図1: 新規住宅着工戸数の推移

資料: 国土交通省「建築着工統計調査報告(平成22年度分)」

2. 調査結果

本研究では、福岡、大分、宮崎のそれぞれ県の木材登録をしている合計126社の製材業者へとアンケートを送り、計46サンプルを得た。回収率は36.5%である。

経営形態は株式会社が23社、その他有限会社や個人経

営などが23社を占めていた。年間消費丸太量は500 m³から5万m³まで分布しており、株式会社はその他と比べて規模が大きい傾向があった(図2)。

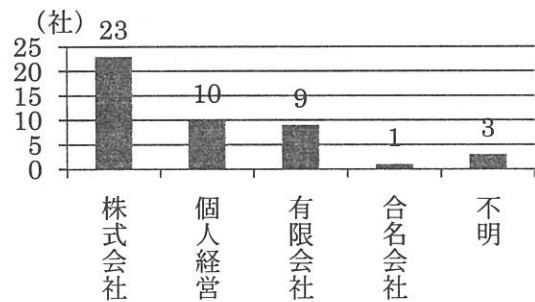


図2: 回答企業の経営形態

資料: 2011年調査より作成

原木の仕入れ先は大部分が原木市場だったが、10年前と比較すると国有林、素材生産業者からの仕入れが最も増加していた。原木樹種は大部分がスギ、次いでヒノキだった。10年前と比較するとスギは変化なし、ヒノキは減少の傾向があった。

仕入れ原木の径級を見ると、22~28cmが最も多く、13cm以下が最も少なかった。10年前と比較すると、22cm以上の径級の取り扱いが増加しており、13cm以下の取り扱いが減少していた。

製材機械のkw数は37.5~750kwに分布しており、これも経営形態との相関が見られた(図3)。

丸太を挽ける最大径は、20~110cmに分布しており、60~70cmが最も多かった(図4)。

乾燥材等の生産割合については、現在の生産量はグリーン材が最大だったが、10年前と比較すると天然乾燥材や人工乾燥材が増加しており、乾燥材への転換が見てとれた(図5)。

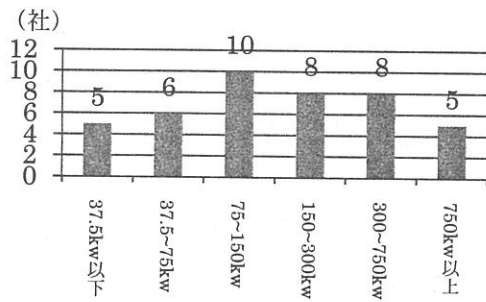


図3：製材工場の規模

資料：2011年調査より作成

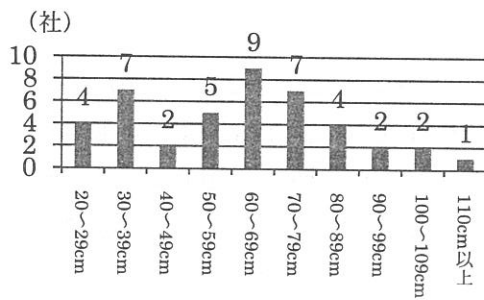


図4：取扱可能原木の最大径

資料：2011年調査より作成

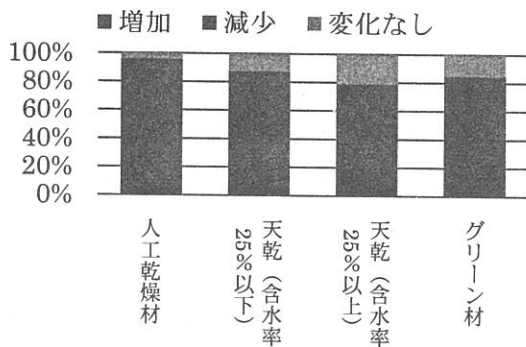


図5：乾燥材等の生産割合の変化(10年間)

資料：2011年調査より作成

製品種類については、割材、板材、平角、柱材の順に多く、平角と割材については目立った増加傾向が見られた。販売先は製品市場、問屋・木材店、工務店・住宅メーカー、プレカット工場が主であったが、プレカット工場と集成材工場が著しく増加し、製品市場と問屋は減少していた。

板材の生産量については、目立った変化が見られず、平均販売単価は全体的に安くなっているように見受けら

れた(図6)。

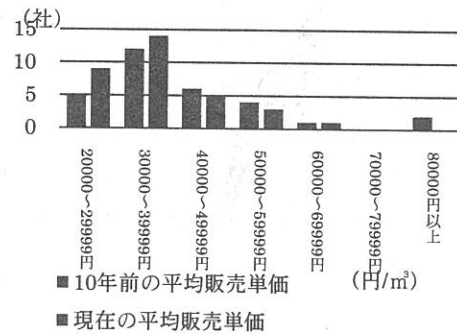


図6：板材の平均販売単価

資料：2011年調査より作成

「板材需要は今後伸びると思うか」という問いに対して、伸びると回答したのは15社、伸びないと回答したのは10社であった。このうち伸びると回答した製材所は柱材の割合を低下させ、板材、平角、割材の生産量を増加させていることがわかった。

3. まとめ

アンケートより、乾燥材への転換が真面目に進んでいること、柱材の生産割合が低下し、平角と割材が増加しており、板材の利用はさほど進んでいないこと、プレカット工場と集成材工場が新たな需要として台頭していること、板材の販売単価の減少がわかった。また、乾燥材を導入している工場は板材に肯定的であり、板材を扱う上で乾燥設備の有無が重要であることがうかがえた。3県の中では特に福岡県の人工乾燥材の導入が遅れていた。さらに、現在規模が拡大している製材工場は今後板材が伸びると回答しており、このことから今後板材需要が増加することはおもむきでなく、板材需要に対応する態勢を整えることが重要であると思われる。

今後の課題として、特に福岡県において県の施策として人工乾燥機の導入を進め、乾燥材を普及させること、それによって板材需要の増加に対応できるようにすることが挙げられる。

参考文献

荻大陸(2009)「国産材はなぜ売れなかったのか」日本林業調査会